

蟹満寺縁起

岡本綺堂

青空文庫

登場人物

うるま おきな
漆間の翁

うば
おば

娘

里の青年
わかもの

(坂東三吉)

蟹

蛇

蛙

里のわらべなど

(一)

時代は昔、時候は夏、場所は山城国。久世郡くぜのこおりのさびしき村里。
舞台の後方はすべて蓮池にて、花もひらき、葉も重なれり。池の
ほとりには柳の立木あり。

(男女の童三わらべは唄い連れていず。)

唄かえる 蛙釣ろうか、蟹釣るか、蓮をかぶった蛙を釣るか、はさみを
持った蟹釣るか。

(三人は池にむかつて手をたたきながら、一と調子はりあげて又

唄う。）

唄 蛙釣るか、蟹釣るか。水にとび込む蛙を釣るか、穴にかくれた蟹釣るか。

（わらべ等は唄い終りて、更にはじめの唄をくり返しつつあゆみ去る。水の音しずかにきこゆ。蓮の葉をかき分けて、小さき蛙は頭に大いなる蓮の葉をかぶりておどりいず。）

蛙 ええ、さうぞうしい餓鬼共だ。子供というものはなぜああ騒ぎたいのだろう。いや、そう云えば俺だつて子供だ。陰くもつてあたたかい静かな晩などは、なにか一つ唄つてみたいような気がして、精一ぱいの大きな声を出して、あたり構わずにぎやあぎやあ呶鳴ることもあるから、あんまり人間の悪口も云えまいよ。いたずら

つ児ももう行つてしまつたようだ。おれも一番陽気に唄つてやるか。

(蛙はあたりを見まわして、唄いながら踊る。)

蛙 人を釣ろうか、こどもを釣ろか。死んだ振して子供を釣ろか。
……ああ、面白い、面白い。

(蛙は蓮の葉を地にしきて坐す。柳のかけより大いなる赤き蟹い
ず。蟹は武装して、鋏のごとき刃をつけたる長^{なぎなた}刀を携えたり。)
蛙 やあ、蟹の叔父さんだね。

蟹 人間の子供もそうぞうしいが、おまえも随分そうぞうしいな。
あけても暮れても騒いでいる。蛙の子は蛙とはよく云つたものだ。
おれ達を見習つてちつと黙つていろ。

蛙 蟹の叔父さんのように黙っていると、おらあ病氣になつてしまふよ。こうして時々おかに陸へあがつて来て、唄つたり踊つたりするのが何よりの楽しみなんだ。

蟹 陸には怖いものがあるのを知らないか。

蛙 人間の子供なんか、怖いものか。あいつ等がつかまえに来れば、おらあすぐに水に飛び込んでしまふから大丈夫だ。

蟹 おまえ達には人間よりももっと怖いものがあるぞ。

蛙 なんだろう。(考える。)むむ。蛇か。

蟹 その蛇だ。蛇は人間よりも足がはやい。木のかげや草のあいだに隠れていて、お前たちの姿を見付けると、不意にするすると駈けて来て、あたまから一と呑みに呑んでしまふぞ。蛇はおまえ

達に取つては何よりもおそろしい敵だ。蛇にみこまれたが最後、とても逃がれることは出来ないのだから、そのつもりで用心しろ。

蛙 蛇はそんなに強いかねえ。

蟹 おまえ達よりも確かに強い。

蛙 じゃあ、叔父さんだつてかなわないだろう。

蟹 いや、おれはこの通り頑丈な甲よろいで身をかためている。おまけにこういう鋭い武器をもっているから、蛇の方で却つて怖がるくらいだ。

蛙 なるほど叔父さんは強そうだね。おらあこの通り小さいから弱いのだ。

蟹 それだから早く大きくなれ。大きくなって強いものになれ。

お前だつて強くなれば、小さな蛇ぐらいはあべこべに呑んでしまふことができるのだ。おれも昔は弱いものであつた。敵を見るとすぐ逃げて隠れたものだけでも、今はこんなに大きい強い者になつたから、大抵の敵が来たつて驚きはしない。こつちから向つて行つて、鋏でチョン切つてしまうのだ。俺ばかりではない。どこの世界でも強いものが勝つのだ。

蛙　じゃあ、叔父さん、強い叔父さん。もしもここへ蛇が来たら、おまえ後生だから助けてくれないか。

蟹　よし、よし、俺がきつと救つてやるから、安心して遊んでいろ。おれはあの木のかげへ行つて、甲羅こうらをほしながら午睡ひるねをしているから、なにか怖い者が来たら、すぐに俺をよべ。いいか。

蛙 おまえが加勢してくれば安心だ。じゃあ、頼むよ。

蟹 よし、よし。

(蟹は再び柳のかげに入る。)

蛙 さあ、蟹の叔父さんが味方をしてくれるから大丈夫だ。もう少しここらで遊んでいようか。や、向うから誰か来るようだぞ。

蛇 やいたずらつ兎とは違つて美しい娘だ。俺をひどい目に逢わすようなこともあるまい。平気で唄でも唄っている。いや、そうでもない。人は見かけに寄らぬものだ。まあ、一旦は隠れてた方が無事かも知れない。

(蛙は池にとび込みて、蓮の葉のかげにかくれる。漆間うるまの翁の娘、きぬ衣を洗わんとていず。)

娘 きようもどうやら陰くもつて来た。降らないうちにこの着物を洗
つて置こうか。(池をのぞく。)おお、池の水も澄んでいる。

(娘は池のほとりに立寄りて衣きぬを洗う。蛙の声きこゆ。)

娘 おお、蛙が面白そうに唄っている。わたしも負けない気にな
つて唄おうか。いや、いや、どこにどんな人がいまいものでも無
い。人に聞かれたら恥かしい。まあ、まあ、黙つて洗いましよう。

(蛙はしきりに鳴く。娘は衣きぬを洗いおわる。)

娘 まあ、これでよし。そのの枝にかけて乾ほして置きましょう。

(娘は柳の樹に衣きぬをかけて去る。蓮の葉をかき分けて、蛙は再び
いず。)

蛙 あの娘も遠慮せずにか何か唄えばいいのに……。おれ達のは唄

うと云つても、唯むやみに呶鳴るのだが、ああいう美しい娘の喉のどからは、さだめて鈴のような可愛らしい声が出るだろう。どうかして一遍聞きたいものだ。時に蟹の叔父さんはどうしたろうな。相変わらず口から泡をふいて高いびきで寝ているのだらうな。(柳の蔭をのぞく。)なるほど、強いものは違つたものだ。こんなところでもいい心持そうに寝ているな。一体、きようは風も吹かず、日も照らず、なんだか薄ら眠いような日和だ。おれもさつきから唄いくたびれたから、ここらで一と寝入りやらかすかな。これを頭にかぶっていれば、誰もちよいと気がつくまいよ。

(蛙は蓮の葉をかぶりて寝る。蛇いず。頭には蛇をいただききて、身には鱗の模様ある衣きぬを被たり。)

蛇 このごろは蛙もなかなか利口になって、遠くからおれの姿を見ると、すぐに水へ飛び込んでしまうから、容易にこつちの口へ入るようなことがない。なんでも油断しているところを不意に飛び付いて、一と息に吞んでしまわなければいけないのだ。（云いつつかの蓮の葉に眼をつける。）や、あの蓮の葉がおかしいぞ。どれ、どれ。

（蛇は進んで蓮の葉のそばへ行き、足にて軽くうごかせば、蛙は葉のあいだより顔を出し、蛇を見るよりはつと縮まる。）
蛇 案じょうの定、こんなところに隠れていた。さあ、もう逃がしはしないぞ。おとなしくしている。

（蛙は葉をかぶりしまま逃げんとす。）

蛇 ええ、逃げてても駄目だぞ。おれにみこまれたらもう一と足でも動けるものか、ははははははは。

(蛙は小さくなりてうずくまる。蛇はしずかにねらい寄る。蛙は這いながら逃げまわる。以前の娘又もや衣きぬをかかえていず。)

娘 どうしても明日は雨あしたらしい。降らないうちにもう一枚洗って置こう。(云いつつ歩み来たりしが、このていを見るより走り寄る。) まあ、待つてください。可哀そうにこんな小さな蛙をどうするのです。

蛇 どうするといつて、強いものに出逢った弱い者の運命は大抵きまつているのだ。

娘 でも、あんまり可哀そうで……。まあ、御らんなさい。あん

なに小さくなつてふるえていますよ。

蛇 今にふるえることも出来なくなるのだろう。

娘 ごしょう 後生ですからその蛙を堪忍してやってくださいな。今わた

しがあの着物を洗っていたときに、面白そうに唄っていたのはきつとあの蛙でしたよ。

蛇 そうかも知れない。誰でも運命の手に掴まれるまでは、なんにも知らずにいるものだ。

娘 なんにも知らずにいる者を殺すのはあんまり可哀そうでしょう。無慈悲でしょう。

蛇 可哀そうでも仕方がない。今もいう通り、弱いものは強い者に吞まれるのだ。おれが決めたのではない、神様がそう決めたの

だ。

娘 でも、あんまりむごいことを……。

(蛙は救いを求むるがごとくに、娘の袖のかけに隠れる。)

娘 後生だからこの蛙を助けてやって下さいな。わたしが頼みますから……。

蛇 おまえが頼むか。

娘 この通り、拝みますから。

蛇 よし、ゆるしてやろう。

娘 ほんとうですか。まあ、嬉しい。(蛙にむかいて。) さあ、

お前、早くお逃げよ。これにこりて、もううつかりと陸^{おか}へ上がるんじゃないよ。

(蛙は喜びて早々に池へ逃げ去る。)

娘 御覧なさい。あの通り喜んで逃げて行きましたよ。ああ、わたしはほんとうによい功德くどくをしました。

蛇 お前はほんとうに善いことをした。

娘 こんな嬉しいことはありません。

蛇 それでおれはお前のたのみをきいた。その代りにお前もおれの頼みをきくだらうな。

娘 お前の頼みというのは……。

蛇 おまえの婿になりたい。

娘 え。

蛇 おまえのような美しい女の婿になりたいのだ。

娘 でも、親達が承知しないでは……。

蛇 親達などはどうでもよい。おれはお前と約束したのだ。

(娘は恐れて黙す。)

蛇 おまえの家はちゃんと知っている。今夜、酉とりの刻の鐘が鳴るのを合図に、おれはお前のところへ媚入りするのだ。いいか、忘れるなよ。

(云い捨てて蛇はしずかに歩み去る。娘はしばらく茫然としてい
る。)

娘 さあ、大変なことになってしまった。あの蛇がわたしのところへ媚に来る……。まあ、どうしたらよかろう。蛇は執念が深いというから、一旦みこまれたが最後、どこまでもわたしに付きま

とつて来るに相違ない。あの蛇が……。あのおそろしい、いやらしい蛇がわたしのところへ婿に来る……。ええ、かんがえてもぞつとする。わたしがもつと強ければ、蛇なんか幾匹押し掛けてたつて、かどぐち門かどぐち口から追ひ払つてしまふのだけれども、わたしは女だ……。弱い女だ。おとっさんやおつかさんも年をとつている。わたしの家には強いものは一人もないのだ。こうと知つたらあの蛙を救つてやるのではなかったものを……。ああ、わたしは飛んだことをして、飛んだものにみこまれてしまった。

（雨少しくふりいず。娘は空をあおぐ。）

娘 いつの間にか雨が降つて来た。（柳にかけたる衣きぬをはずす。）
今夜はきつと雨が降つて、暗いものすごい晩に相違ない。おそろ

しい蛇が……執念ぶかい蛇が……どんな姿をして来るだろう。

(身をふるわせる。) ああ、どうしたらよかろう。ここで泣いていても仕様がなない。ともかくも早く家へ帰つて、おとっさんやおつかさんと相談するよりほかはあるまい。早くそうしましよう。

(娘は二つの衣をかかえ、しおしおとあゆみ去る。柳のかげより蟹いず。)

蟹 いい心持で午睡ひるねをしている枕もとで、泣いたり笑つたり、がやがや騒ぐので、すっかり眼がさめてしまった。あの蛙め、早くおれを呼び起せばいいのに、蛇にみこまれてふるえ上がつて、もう声も出なくなつたのだろう。ほんとうに弱い奴だ。(あざわらう。) しかし又、あの娘さんもあんまり無考えだな。いくら蛙が

可哀そうだといって、自分も弱い女の癖に、うつかり差し出るからこんなことになるのだ。

(蛙の声きこゆ。)

蟹 蛙の奴め。自分の代りにあの美しい娘を人身御供ひとみごくうにして置きながら、平気で面白そうに唄っているが、娘の家では今ごろ大騒ぎをしているだろう。可哀そうなものだな。

(二)

おなじ里、漆間うるまの翁の宿。舞台にあらわれたる家の中はすべて土間にて、奥の間には古き簾すだれを垂れたり。上のかたに大いなる土どべっ

竈^{つい}ありて、消えかかりたる藁^{わら}の火とろとろと燃ゆ。土間には坐るべき荒むしろと、腰をかくべき切株などあり。ほかに鋤^{すき}の農具あり。打ちかけたる藁屑^{もくず}など散乱す。下のかたには丸太を柱としたる竹門あり。門の外には大樹あり。樹の間がくれにかの蓮池遠くみゆ。

(白髪の翁と姫は竈のまえに語る。)

姫 どうも困ったことが出^{しゅったい}来^いしたが、お前さんはまあどうするつもりだね。

翁 どうするといつて、これも因果とあきらめるよりほかはあるまい。

嫗 あきらめられるお前さんはしあわせだ。わたしにはどうしてもあきらめられない、十七のときまで大事に育てた、かけがえの無いひとり娘を、おそろしい蛇の人身御供ひとみごくうにするのを黙ってあきらめていられるお前さんは、ほんとうに羨ましい。

翁 ええ、もう泣いてくれるな。おれだって人間だものを……。可愛い娘が蛇にみこまれたと思えば、おそろしいやら悲しいやらで、涙が胸一杯にせき上げて来るのを、齒をくいしばってじっと我慢しているのだ。そばでお前に泣かれると、俺ももう我慢ができなくなる。まあ、仕方がない。あきらめろよ。

嫗 どう考え直しても、わたしには我慢もあきらめも付かない。まあ、なんたる情けないことだろう。あんな美しい可愛い娘を：

∴。

翁　もう、もう、止してくれ。後生だから……。無い昔とあきらめてくれ。

嫗　いつそ無い昔なら苦勞もなかつたろうが、夫婦が四十を越すまで子というものが無いのをかなしんで、弁天様に三七日の願をかけたら、その奇特きせきであんな美しい娘が生まれた。やれ、嬉しやと手塩にかけて生長させ、近いうちに相当の婿を取って、わたし達もまず安心しようと思しんでいると……。

翁　とんでもない婿が出来た。(つぶやく。)

嫗　ほんとうに、飛んでもない災難が降ってわいて、大事の娘を蛇に取られる。かんがえてもぞつとして身の毛がよだつような。

もし、なんとかして娘を助ける工夫は……。ああ、わたしはもう
気ががいになりそうになつて来た。

（夫のそばにすり寄る。翁はじつと頭を垂かしられている。）

翁 まあ、騒いでくれるな。きちがいになるなら、おれの方が先
になる筈だ。弁天様をお願い申して出来た子だから、蛇にとり返
されるのも自然の約束だろうよ。蛇は弁天様の使わしめだ。

嫗 そう云いながら、お前さんだつて泣いているじゃあないか。

翁 さつきから泣くまいと一生懸命にこらえているのに、おまえ
がそばからいろい로운愚痴を云うので、おれも我慢が出来なくな
つて来たのだ。

嫗 やせ我慢をしないで、泣きたいだけ泣いた方がいい。子を取

られて泣く親のなみだが、神様のお目にとまって、思いもよらぬ御救いがないとも限らないから……。

翁 なんの、神様も仏様もあつたものじゃあない。あてにもならないことをあてにしているうちに、時は猶予なくたつてゆく。酉の刻にはもう半はんとぎ晌もあるまいよ。

（翁はうつむきて嘆息す。嫗も泣く。奥の簾をかかげて娘いず。）
娘 おふたりともにもう泣いてくださるな。わたしは覚悟をきめています。

嫗 おお、娘……。 （走り寄つて娘を抱く。） おまえの覚悟は決まっても、わたし達の覚悟は容易にきまるものじゃあない。どうしても怖ろしい婿は来るかねえ。

娘 酉の刻の鐘を合図に、きつと来ると云いました。

翁 その鐘もやがて鳴るであろう。

姫 お前は一体なぜそんな約束をしたのだ。蛇が蛙を呑むのはあたりまえのことだから、構わずに打ちちゃっておけばいいのに……。

娘 あんまり可哀そうでしたから、つい助けてやる気になったのですが、今更思えばそれが悪かったのです。わたしもやっぱ蛙と同じように、弱い者であつたのでした。

翁 おれも蛇よりは弱いのだ。

姫 この家には蛇より強いものはひとりも居ないのだ。

娘 弱いものを救うには自分が強い者でなければならぬという

ことを、今初めてさとりしました。自分をまもってゆくほどの力も無い者が、ひとを救おうとしたのはあやまりでした。もう仕方がありません。わたしは覚悟して時刻の来るのを待っていますよ。姫 待っていてそれからどうなるだろう。かんがえても怖ろしいことだ。

翁 むかしの稲田姫は八股やつまたの大蛇おろちに取られるところを、素盞すさのおの鳴尊のみことに救われたが、ここにはそんな強い男もあるまいよ。

姫 それでもこのままに娘は渡されまい。約束の時刻になったなら、蛇がどこからもはいつて来られないように、四方の戸をしつかりと閉め切つて、夜の明けるまで張番をして居ようかと思うが……。

翁　でも、あしたの晩もまた来るだろう。

嫗　あしたも明後日あさっても、三日も五日も十日とおも、一と月も二た月も、

毎晩強情に防いでいたら、いくら執念深い蛇でもあきらめて、しまいには来なくなるかも知れない。

翁　おまえがあきらめられぬと同じことで、むこうも容易にはあきらめまい。根こんくらべならやつぱり強い者の方が勝つわ。

（三人は顔を見あわせて嘆息す。里の青年わかもの一人、太刀をはき、弓矢をたずさえていず。）

青年　もし、もし。

翁　や、もう来たのか。

（嫗はあわてて娘を我がうしろに隠す。翁はうろろうろする中に、

わかもの
青年は進み入りて顔を見合わせる。)

翁 おお、お前さんか。まあ、よかつた。

青年 どうも飛んだことが出^{しゅったい}来したそうですね。

嫗 では、もう知つていなさるのか。

青年 さつき娘御から聞きました。しかし御安心なさるがよろしい。その蛇が来たら私が退治してみせます。

翁 お前さんが退治してくれるか。

嫗 ほんとうに蛇を退治してくださいさるか。

青年 わたしが素盞鳴尊になりました。私にはこの弓と矢があります。

翁 おまえさんは弓が上手かね。

青年 空を飛ぶ鳥でもかならず射落します。蛇が今夜ここへ襲つて来たなら、まず一の矢でそのひかつた眼を射透してみせます。二の矢でその咽喉を射ぬいて見せます。大丈夫だから御安心下さい。姫 ありがとうございます。お前さんがその弓と矢で、おそろしい蛇を退治してください。娘も助かります。わたし達夫婦も助かります。娘、もう大丈夫だよ。おまえはきつと助かるから……。

娘 助かるでしょうか。

姫 この人は強いのだよ。

娘 強いでしょうか。

青年 わたしは自分でも強いものだと思っています。

翁 お前さんはほんとうに強そうだ。やれ、やれ、これでようよ

う安心した。

嫗 わたしもようよう落付いた。

娘 安心ができませんようか。

翁 そんな心細いことを云うものではない。なんでも気を強くもつていろよ。

(雨の音薄くきこゆ。人々は表を窺う。)

青年 おお、雨がまた降つて来た。

翁 もう日が暮れるなあ。

青年 今のうちに弓の弦つるでも張つて置こうか。

(青年は弓の弦を張る。翁は立寄つて見る。)

翁 なるほど、太い弦だ。これを強く張つて矢を放したら、鉄の

鎧でも射透すだろう。

嫗 いくら大きな蛇でも急所を射られてはたままるまい。

（青年はほほえみながら弦つるうち打二三度して、弓をかたえの壁に立て、更に太刀をぬきてすかし視る。）

青年 この劍つるぎで蛇の頭を切るのです。

翁 おお、なるほど。これもよく切れそうな刀だ。

青年 この通りにとぎ澄ましてあります。

嫗 憎い蛇めをずたずたに切つてやりたいものだ。

（青年は太刀を鞘に収める。雨の音いよいよ烈し。）

翁 雨がだんだんに強くなつて来たぞ。

嫗 内も外も暗くなつて来た。

娘 風も少し吹き出したとみえて、草や木がざわざわ鳴っています。

青年 怪しい物の出そうな晩ですな。

(人々は顔を見あわせて、ようやく不安の念に襲わる。)

娘 もうやがて鐘がきこえるでしょう。

翁 むむ。

(人々は息をのんで待つ。やがて酉の刻の鐘きこゆ。)

姫 おお、鐘が鳴った。

青年 鐘が鳴りました。

(鐘の音つづいてきこゆ。娘は思わず母にすがる。姫は娘を抱きよせて、あたりに眼を配る。翁は入口の門をしかとしめて錠をお

ろす。）

翁 こうして置けば大丈夫だ。いや、まだ裏口が不安心だ。

（翁はあわてて奥へ走り入る。）

嫗 （声を低める。）蛇はいよいよ来るでしようか。

青年 来るでしよう。しかし御安心なさい。

嫗 大丈夫でしようか。

青年 大丈夫です。

（翁は再び奥よりいず。）

翁 もう何処もかしこもすつかり閉めて来たから、大丈夫だ。家には鼠が潜り込むほどの隙間もないぞ。

（雨風の音きこゆ。娘は物におそわれたように叫ぶ。）

娘 あれ、あれ、門かどに……。

嫗 （怖るおそる門をのぞく。）いや、外は真闇で、雨が降つて
いるばかりだ。誰も来やあしない。

娘 でも、なんだか躑あし音が……。

嫗 しつかりおしよ。怖くはないよ。

青年 わたしがここにいます。

（しばしの沈黙。やがて一種の音して、
は自然に切れる。人々おどろく。）
青年の張りたる弓の弦

青年 や、弓の弦が切れた。

翁 あんなに太い弦が自然に切れた。

（人々は顔を見あわせてしばらく黙す。）

青年 どうも不思議なことがあるものだ。（考える。）弓が役に立たなければ、これで防ぎます。

娘 （又もや叫ぶ。）あれ、あれ。

姫 なんにも来やあしないよ。

青年 わたしはこの剣を持っています。どんな魔物でも名剣の威徳にはかありません。これをじつと見ておいでなさい。自然に気が鎮まります。

（太刀を娘の前に差付けると、太刀は鍔ぎわより自然に折れる。今度は声を出すものなく、人々はただ黙して眼を見あわせ、いよいよ恐怖の念に襲わる。）

翁 ああ、駄目だ、駄目だ。おまえさんもやつぱり駄目だ。

(わかもの青年は残念そうに折れたる太刀をながめて立つ。しばしの沈

黙。蛇は衣冠を着け、優美なる姿にて奥よりあらわる。)

翁 ああ、婿が来た。

姫 え。(いよいよ娘を抱きしめる。)

蛇 約束の通り、婿に来たぞ。祝言の用意は出来ているか。

(人々答えず。)

蛇 酒の用意はあるだろうな。

翁 酒は沢山にたくわえてあるから、飲みたいだけ飲んでください。ほかに欲しいものがあるならば、なんでも上げます。

蛇 それだから娘を貰いに来たのだ。

翁 その娘だけは……。どうぞ堪忍してくださるまいか。

嫗　ほかのことなら何でもききますから、どうぞこればかりは……。この通り、拝みます。

蛇　お前達はなんにも云わぬがよい。娘はとうに承知しているのだ。

青年　いや、その娘も不承知です。

蛇　お前もだまつている。今更故障を云うと、お前たちの為になるまい。これ、よく見ろ。おれの大きい眼はみがいた鏡のようにかがやいている。この眼で一度睨めば大抵のものは縮んでしまうぞ。おれの口には赤い舌が火のように燃えている。この口を一度あけば大抵のものは一と息に呑んでしまうぞ。もう一度よく見ろ。おれのからだには鉄のような鱗が一面に生えている。この鱗をさ

か立てると大抵の矢も刀もおすことはできないぞ。おれはこれほどの武器をもっているのだ。それを知らずに防ごうとするのは馬鹿な奴だ。

（青年わかものを見てあざ笑う。青年は太刀の柄をすてて、更に弦の切れたる弓を取りしが、容易にかかり得ず、徒らいたずらに睨みいるのみ。）
蛇 さあ、娘。こつちへ来い。

（蛇は袖をあげて差し招けば、娘は母の手を放れてふらふらと歩みゆく。蛇は娘の手を取りて奥に入る。翁と嫗とは茫然としてそのあとを見送る。）

青年 残念だが仕方がない。私にはひとを救うほどの力がないのか。

（わかもの青年は持ったる弓をなげ捨つ。やがて奥にて凄まじき物音きこゆ。）

翁 や、あの物音は……。

姫 娘が長い蛇に巻かれて苦しんでいるのではあるまいか。

翁 どうかして助ける工夫は無いかなあ。

（翁と姫とはうろうろして奥を窺ううちに、奥より蛇は髪をふり乱して走りいず。蟹は赤き甲よろいをつけ、かの長なが刀なたを持ちて追い出ず。）

蟹 卑怯者め。逃げるな。

（蟹は長刀を揮ってかかる。蛇は口より火をふきて奮闘。遂に蟹のために切倒さる。）

翁 さすがの蛇も蟹にはかなわないと見えて、長い鋏でずたずたに切られてしまった。やれ、やれ、ありがたい。これでまず安心した。

姫 それにしても娘はどうしたろう。

(娘は奥よりいず。)

姫 おお、娘。無事でいてくれたか。

翁 おお、娘……。 (走り寄って娘を抱く。)

娘 おつかさん。

姫 助かったか。

娘 助かりました。おそろしい蛇にまき付かれて、どうなることかと思つていましたら、この強い蟹がどこからかはいつて来て、

長い鉢で蛇を追いはらつてくれました。

蟹 追い払ったばかりでない。二度とわざわざいをなさないように、この通り亡ぼしてしまつた。

青年 なるほど、お前は強いな。

蟹 おれは強い。強ければこそ弱いものを救つたのだ。弱い者が弱いものを救おうとするのは、泳ぎを知らぬ者が水に溺れたものを救おうとするようなもので、両方ともに沈んでしまふばかりだ。弱いものを救いたければ、自分がまず強いものになれ。おれのよくな強い者になつて、弱いものを救うのが自然の順序だ。弱い奴等ばかりが蛆虫のようにあつまつて、口のさきで慈悲の情けのと騒いでいるばかりでは、いつまでたつても際限はてしがあるまい。所詮

は強い者の世の中だ。みんなも精出して強くなれ。世間に強いものが多くなれば、弱いものは自然に救われるのだ。

青年 判った、わかった。わたしもこれから強くなろう。年寄りや女子供を救うのは若い者の務めだ。

蟹 弱い奴の千人よりも、強い奴の方が頼もしいのだ。しつかり頼むぞ。

青年 よし。私はおまえの見る前で、神に誓おう。

(わかもの青年は投げ捨てたる弓を取り、ひざまずきて額にいただく。)
娘 わたしは命を助けられた恩がえしに、蟹のすがたを絵にかかせて、末代までも残るように、近所のお寺へ納めましょう。

翁 おお、いいところへ気がついた。蟹に救われた人間があると

いうことを世間の人に知らせるために、蟹の姿を絵にかかせて、お寺に納めて置くがよかろう。

嫗 やがてそれがお寺の名になって、やましろうのくに山城国に古蹟が一つ殖えるかも知れない。

蟹 そんなことはどうでもいい。用が済んだらおれは帰るぞ。

（蟹は長なぎ刀をたずさえて悠々と奥に入る。翁と嫗と娘はそのうしろ姿を拝む。青年わかものは腕をくみて考える。）

——幕——

〔「大正演芸」大正二年二月号掲載／大正九年六月、神戸中央劇

場
で
初
演
)

青空文庫情報

底本：「伝奇ノ匣」岡本綺堂妖術伝奇集」学研M文庫、学習研
究社

2002（平成14）年3月29日初版発行

初出：「大正演芸」

1913（大正2）年2月号

入力：川山隆

校正：門田裕志

2008年12月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蟹満寺縁起

岡本綺堂

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>